

# 令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市等名

滋賀県

学校名

能登川高等学校

人権課題

子供、女性、  
性的指向、性自認

対象学年・  
取り扱った教科等

1 学年・LHR  
保健、家庭

時数等

7

目標・人権教育のねらい

性に関する正しい知識や自他の性に対する認識を深め、望ましい人間関係を築いていくことができる能力や態度を養う。

実施した内容

LHRでは、講演「性に関するライフスキル（動画視聴を含む）」を実施し、事後アンケートの感想の一部を保健だよりに掲載した。保健では、副教材「高校生が知っておきたい性と健康のこと」、漫画「10代のための性の世界の歩き方」、DVD「小さな生命の詩」などを活用して授業を行った。家庭の授業では、「自分らしく生きる」をテーマに、自分の性や男女の在り方について考えさせた。

工夫した点

- (指導上の工夫)
- ・事後アンケートを実施し、振り返りを行って定着をはかった。(LHR) (保健)
  - ・保健だよりにアンケート結果を掲載し、皆の意見を共有した。(LHR)
  - ・10代の性の問題について、より理解を深めやすいように、イラストが豊富で文字情報の整理された漫画や副教材を活用した。また、性意識の捉え方では、LGBTQIAを取り上げ、性的指向や性自認に踏み込んだ内容となるよう意識した。(保健)
  - ・DVD「小さな生命の詩」で、新たな生命の始まりから誕生までを鑑賞させた。(保健)
  - ・男女の性の在り方について、自分にとっての「ふつう」とは何かを考えさせ、同時に日本社会における男女の性の在り方を比較しながら、自分自身が今後拓いていくジェンダーレス社会のライフスタイルに活かせるようにした。(家庭)

# 令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との  
関連

文学国語、論理国語、政治経済、公共、歴史総合、日本史探究、世界史演習、社会演習、保健、英語コミュニケーションⅠ、家庭基礎、保育基礎、国際理解

事業成果

## 知識的側面

保健では、「月経前症候群について、女性の大変さがわかった」「低用量ピルの正しい知識を学べた」「無痛分娩を初めて知った」といった意見や、家庭では、「『性的少数者』と呼ぶ必要のない社会になるよう考えていくことの重要性を知った」といった意見もあり、性に関する新しい知識や社会の在り方について学んだ。

## 価値・態度的側面

LHRでは、講演前後で自分の気持ちに「とても変化があった」27%、「まあまあ変化があった」47%と、自分や相手を尊重するべきとの感想が多く、「暴力は愛ではないとの言葉が印象に残った」等、暴力に対する意識の変化が見られた。

保健では、男子の「月経前症候群や月経痛の対策を知ることができてよかった」という意見や、女子の「100%避妊できるとは言い切れない」「匿名で無料相談できる窓口があることを知った」等、いざという時に頼りとなる方法の理解や、困っている人がいたら助けてあげたいといった今後の行動の変化につながる感想があった。

家庭では、自分の性の在り方が「ふつう」であるという思い込みを見直し、ジェンダーレス社会にどのように向き合っていくのかを意識させることができた。

## 技能的側面

LHRでは、「DVや性感染症など、迷わず相談した方がいい」「単純な気持ちで判断を鈍らせないことが大事」等、今後の人との付き合い方を学ぶ機会となった。保健では、各自のタブレットで動画を鑑賞し、自己や他者の価値を感知する感覚を養った。

# 令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市等名

滋賀県

学校名

能登川高等学校

人権課題 障害者

対象学年・  
取り扱った教科等

全学年・LHR

時数等

10

目標・人権教育のねらい

盲ろう者の方の半生を辿る中で、目や耳が不自由とはどういうことかを理解し、また、その生き方を学ぶ。

実施した内容

事前学習では、盲聾疑似体験と事前アンケート（Forms）を行い、映画「桜色の風が咲く」を鑑賞し、事後の統一LHRでは、討議の柱（映画の感想、普通とは？、その他）に基づいて討論を行った。また事後アンケート（記述・Forms）の結果を人権通信に掲載し、共有した。

工夫した点

（指導上の工夫）

- ・映画鑑賞に先立ち、事前学習で盲聾疑似体験を可能な範囲で行い、当事者意識を持てるようにした。また、統一LHRでは他者の意見を知る機会として討論を実施した。
- ・特活委員会を中心に行う統一LHRを円滑に行うため、委員を集めて事前学習会を開き、ねらいを確認した。
- ・事前に人権通信「青い鳥」を発行し、映画の当事者の方の情報を発信した。また、幅広く他者の意見を共有できるように、事後アンケートの意見の一部を次号の人権通信に掲載した。

# 令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との  
関連

政治経済、公共、社会演習、英語コミュニケーションⅠ、英語コミュニケーションⅡ

事業成果

## 知識的側面

事前アンケートでは、「盲聾という障害を知らない」22%、「街中で白杖を持った人を見たことがない」30%、「これまでお手伝いをしたことがある」は数人であった。事後アンケートでは、「盲聾者の方の置かれている現状を知ることができた」33%、「盲聾者の方の感じ方を知ることができた」48%で、盲聾者の立場を知る機会となった。映画「桜色の風が咲く」は「とても良かった」「良かった」で96%と、ほぼ全員が集中して鑑賞できた。

## 価値・態度的側面

事前学習の実体験では、「見えない恐怖がこんなにも大きなものだと知った」が大多数を占めたが、コミュニケーションの仕方を考えたグループの中には「コミュニケーションは難しいけれど、出来ないということはない」と前向きな意見も見られた。映画鑑賞後のアンケートでは、盲聾者の方に対する意識について、「映画を見る前と変わった」83%、「様子を見たり、声をかけたりできそう」「見かけたら、積極的に声をかけたい」は合わせて33%と、盲聾者の方への前向きな関わりや態度の変化が見られた。

## 技能的側面

「目が見えなかったり耳がきこえないことは別にマイナスじゃなくて（問題じゃなくて）これから自分がどうやって強く生きていくのか考えるのが問題なんだと理解できた」等、今後、自分も強く生きていきたいとの思いを持つ機会となった。

# 令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市等名

滋賀県

学校名

能登川高等学校

人権課題 同和問題

対象学年・  
取り扱った教科等① 2 学年・LHR  
② 3 学年

時数等

① 2 ② 1

目標・人権教育のねらい

- ①近年、インターネット掲示板等で、同和問題に関する差別的な内容の書き込みが増加している。このような現状を踏まえ、2年次に同和問題に関する正しい知識を得られるよう設定した。
- ②就職や進学における面接の持つ意味を理解し、ふさわしくない質問を見抜き、毅然として対応する意識を身につける。

実施した内容

- ①部落差別やインターネット上での人権侵害等について、事前アンケート（Forms）を行い、講演に向けて意識付けを行った。実体験を基にした講演「昔の私、今の私、私を変えた結婚差別」を聞いて理解を深めた。また、事後アンケート（記述）をとり、一部を人権通信に掲載して意見を共有した。
- ②実際の面接での質問例を用いて、不適正質問について学んだ。

工夫した点

- （指導上の工夫）
- ①実体験を基に生徒目線での講演が可能な方を講師として選定した。また、事前アンケート（Forms）を実施し、同和問題に対する意識付けを行った。
- ②学んだ知識が定着するよう、実際の面接での質問例をもとに○×形式で答えさせてから理由を考えさせた。また、他者の価値観が共有できるよう班別討議の時間を設けた。
- ①②事後アンケート（記述）を実施し、また、他学年にも学びを共有できるように、意見の一部を次号の人権通信に掲載した。

# 令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との  
関連

①②政治経済、公共、日本史探究

事業成果

## 知識的側面

- ①事前アンケートでは「部落差別が現在でもあると思う」が75%だったが、事後アンケートでは「今まで部落差別についてしっかり学んだことがなかったので、今回のお話はとても貴重なものでした」等、これまでの学習機会の有無による知識の差を解消することができた。
- ②事後アンケートでは「思想や家庭の事情を探るような質問はしてはいけないことがわかった」と、学びが深まった記述がみられた。

## 価値・態度的側面

- ①事前アンケートでは「同和問題はそっとしておけば自然になくなる」について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が38%を占めていた。事後アンケートでは、知らなかったことを恥じる意見や、地道な活動のおかげで今があることに気付けた等、人権侵害を受けている方へ支援しようとする意欲や態度を育成できた。また、講演中に質疑の時間が設定され、自分だったらどうするかとの講師からの問いかけに対して、人権課題にどのように関わることができるのかを自分事として考察し、主体的に取り組む態度を育成することができた。
- ②事後アンケートでは「(面接で)落ちないために質問へは答えなければならないと思っていたため、不適切な質問への対応があることを学べた」との意見もあり、就職差別に立ち向かう態度を育成した。

## 技能的側面

- ①事後アンケートでは「私も講師の方の1本の枝となって少しでも差別が減る世の中にするお手伝いをしたいです」と、啓発活動に関心や興味を示す生徒が見られた。
- ②事後アンケートでは「普段から物事の善悪を感じながら行動することで、不適正質問にも気が付けるのではないか」といった偏見や差別を見極める行動へとつながる記述も見られた。

# 令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市等名

滋賀県

学校名

能登川高等学校

人権課題

外国人

対象学年・  
取り扱った教科等①3学年「国際理解」履修者  
②全学年・LHR

時数等

①10 ②3

目標・人権教育のねらい

- ①国籍や民族などが異なることによる互いの文化的な違いを認め合い、グローバル社会における共生のための学習の機会とする。
- ②国際化が進む現在、自分の生活が国際社会とどう関係しているか、自分にできることは何か、高等学校卒業後の人生設計を考える上で知るべきことを学ぶ。

実施した内容

- ①日本ラチーノ学院（ブラジル人学校）との1日交流を実施し、当日までにポスター制作等の準備を行った。当日は、一緒に球技を行ったり、日本文化の紹介をしたり、昼食をともにしたりした。また、事後アンケートで振返りを行った。
- ②講演とワークショップ「世界がもし100人の村だったら（1年）」、講演「日常にある『何気ない』差別に気付けるようになるろう（2年）」、講演「世界と私の繋がり（3年）」後、アンケートを取って振返りを行った。

工夫した点

(指導上の工夫)

- ①・国際課の交流員の出前講座などを用いて、ブラジルについての事前学習を行った。
  - ・訪問前に日本文化紹介のポスターを作成した。また、各ジャンルでグループを作り、意見交流をしながら作成する機会を設け、完成した作品を当日に持参した。
  - ・事後アンケートで、交流前後の外国人に対する意識の変化をまとめさせた。
- ②・講演の場所を体育館とし、講演の中で実際に生徒を動かすワークショップができるよう企画した。（1年）
  - ・日常の何気ない言葉のやりとりを考えさせる内容を企画した。（2年）
  - ・自身が所有するものから世界を考えさせるテーマで企画した。（3年）

# 令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との  
関連

①②政治経済、公共、世界史探究、日本史探究、国際理解

事業成果

## 知識的側面

- ①異なる国にルーツのある人々の価値観や考え方をすることで、食文化の中に日本との共通点を見出すことができた。
- ②「自分がどこかの国に分類されるので、どこの国に富が集まっているか一目瞭然だった（1年）」「外国人の気持ちを知ることができてよかった（2年）」「便利に使用している物の生産過程で多くの犠牲があることがわかった（3年）」など広い視野での気づきがあり、責任や義務についての理解を深めた。

## 価値・態度的側面

- ①日本や郷土の文化についての発表を行う中で、日本についての理解を深めた。また、振り返りシートには「異国にルーツを持つ人々の価値観を受け入れていきたい」と記入した生徒が多く、異文化理解に必要な態度を養うことができ、自他の価値を尊重しようとする意欲や態度を育成した。
- ②「世界の経済格差、貧困状態などを知り、今後の世界の動きに注目していこうと思った」等、新たに興味を抱いたり、自身の態度を改めたいと決意したりするなど、社会に主体的に関与しようとする意欲を高めた。

## 技能的側面

- ①「言葉が伝わらなくても、相手のことを理解しようとする努力をすることが大事」等、異文化理解にとどまらず、他者への共感的な関わり方を学ぶ機会となった。
- ②「自分が貧しい国に分類され負の感情になった（1年）」「良い関係をたくさんの人と築きたい（2年）」「世界でおきていることに、自分も関係があることがわかった（3年）」等、外国人との接点を身近に感じることもできた。また、他国についての知識の習得や外国語習得の大切さに気付いた者も見られ、互いの相違を認めようとする技能を身につけようとしていた。

# 令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市等名

滋賀県

学校名

能登川高等学校

人権課題

犯罪被害者等、インター  
ネットによる人権侵害

対象学年・  
取り扱った教科等

① 1 学年・LHR  
② 全学年・LHR

時数等

① 1 ② 3

目標・人権教  
育のねらい

- ① 日常の高校生活において言葉や行為等で人権を侵害していることがないか、身近な人間関係について見つめなおす。また、高度情報化社会の中で、インターネットの光と影の部分認識し、特にインターネットや携帯電話を用いる際の注意点を知り、自分の気持ちを大切にしながら相手も大切にコミュニケーションスキルを身につけ、充実した高校生活を目指す。
- ② 高校生活において直面するかもしれない事件について生徒に認識させるとともに、高校生としての意思決定の大切さ、正義の心を学ぶ。また、命や心を育む上で大切な「善き人間とは何か」を考え、今後、学校生活を送る上で、どのようなことに気を付けなければならないかを知る機会とする。

実施した内容

- ① 事前アンケート (Forms) で、インターネットと自身の関係について認識し、LHRではインターネットにまつわる代表的な問題についてワークシートを用いて各自考えた後、各自の経験談をふまえたグループ討議を行い、結果を画用紙にまとめ、共有できるよう図書館に掲示した。
- ② 講演を聞いた後、ワークシートを使用して各自で講演を振り返り、また、グループでSNSトラブルについて考えた。

工夫した点

- (指導上の工夫)
- ① ・事前のアンケートから、日ごろのインターネットとの関わりを調査し、個々に問題意識をさせた。
- ② ・実例豊富な警察の方に講演を依頼し、生徒たちへ事件の認識を高めさせた。
- ・講演後に振り返りの時間を設けた。SNSトラブルについてグループで考える時間を設定し意見交流を図った。
  - ・講演にあった「闇バイトの見極め」について振り返る内容を人権通信に掲載し、注意喚起を促した。
- ①② 図書館にインターネットトラブル等に関する書籍を集めた。図書館の閲覧室に各グループで作成した成果物 (画用紙) を掲示し、人権侵害に関する問題を学内で共有した。

# 令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との  
関連

- ①政治経済、地理総合、社会演習、家庭基礎、情報Ⅰ
- ②政治経済、公共、地理総合、社会演習、家庭基礎、情報Ⅰ

事業成果

## 知識的側面

- ①グループでの共有によって、自分の知らなかったトラブル事例を知ることができた。
- ②闇バイトの手口およびSNSトラブルの事例（写真を送る、知らない人に会う、人の悪口をアップする等を行うとどうなるか）から人権侵害に関する知識を学んだ。

## 価値・態度的側面

- ①事前アンケートでは、インターネット利用が、平日は2～3時間、休日はアンケートの選択肢の最大時間である5時間以上が約半数いた。また、「LINE」「Instagram」「YouTube」「TikTok」の4つのSNSは84%が使用しており、「ゲーム等で知り合った人がいる」も50%を超えていた。「実際に会ったことがある」は数%にとどまったが、SNSやゲーム等でトラブルを経験したことがあると回答した者が数名いた。グループ討議では、「詐欺にあった」「注文した商品がにせものだった」「グループLINEに集合写真を送信してしまった」「部活内の出来事がインスタのストーリーによってみんなに知れ渡った」「急にゲームで縁を切る大喧嘩をした」等、深刻なトラブルに発展しかねない具体例を意見交流を通じて共有することで、人権の観点から自己自身の行為に責任を負う意志や態度を高めることができた。
- ②「知らない人からのDMは見ないようにしたり、ブロックしたりして被害にあわないようにしたい」「他の人が悪口を書こうとしていたらすぐに止める」「改めて自分が使うときの言葉を他の人が見て気持ち悪くならないか気にしながら使っていきたい」「わからないときは親や周りの人に相談する」等、自分の行動に責任を持つことを意識させ、他人にも配慮する態度を身につけた。

## 技能的側面

- ①②ワークシートで主なトラブル事例（スマホの過度使用、ながらスマホ、悪口）を考え、「〇時以降は使えないと公言する」「知らない人に会わない、信用しすぎない」「言葉の使い方に気を付け、送信前に必ず見返す」等の解決策を各自で確認し、他人との関係を築く社会的技能を身につけた。

# 令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市等名

滋賀県

学校名

能登川高等学校

人権課題

その他（平和学習）

対象学年・  
取り扱った教科等

2 学年・LHR

時数等

4

目標・人権教育のねらい

修学旅行先の知覧における特攻隊について、戦争に至るまでの過程、当時の戦況の変化、そして知覧で実際に行われたことについて学ぶ。

実施した内容

事前アンケート（Forms）で、過去の戦争や現在各地行われている紛争についての意識を問い、講義では日本が戦争（第二次世界大戦）に至る過程やその前後について学び、事後アンケート（記述）で学んだことを確認した。その上で、関連映画を鑑賞したのち、修学旅行先である知覧に向かい、現地研修を行った。

工夫した点

（指導上の工夫）

- ・ 知覧から取り寄せた事前学習資料と社会科教員による講義によって、戦争に至る背景、状況、その過程をできるだけ詳しく知ることができるようにした。
- ・ 知覧を舞台にした映画作品「あの花の咲く丘でまた君と出会えたら」を鑑賞し、より現状を深く理解できるよう努めた。
- ・ 人権通信「青い鳥」にて、事前学習や事後学習で出た生徒の感想を掲載し共有することで学びを深めた。

# 令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との  
関連

日本史探究

事業成果

## 知識的側面

事前アンケートでは、第二次世界大戦について「学校で学んだ程度の知識ならもっている」53%、特攻隊について内容まで知っている人は半数程度に留まり、今回初めて特攻隊を知ったという者は9名いた。また、事後アンケートから、「特攻隊の理解やイメージが変わった」は61%と半数を超え「どんな理由で戦争を始めたかとその時の状況を合わせて知ることができて良かった」等、戦争の背景まで含めて深く学ぶ機会となった。戦後80年を間近に控え、生徒たちの学習機会も限られてきたが、事前に映画鑑賞をしたり、特攻隊員の家族にあてた手紙や映画のモデルになった食堂の話当日のガイドから説明を受けたりすることで、より知識を深める事ができた。

## 価値・態度的側面

事後アンケートから「これが少し前に起こっていた出来事だと考えるととても怖い。また同じようなことをくり返さないようにこれから生きていく人につなげたい」「感謝を忘れずに1日1日を大切に生きていきたい」等、今後の生活に対して意識の変化が見られた。事前の感想では、生徒自身に十分実感が湧いていない様子が感じられたが、現地見学を通して、実際に特攻を命じられるまで寝泊まりしていた住居跡や、戦闘機などを見学することで、「もし自分だったら」という自分の気持ちに置き換えた感想を口にする生徒も見られ、自分事として、社会に主体的に関与しようとする意欲や態度を育てることができた。

## 技能的側面

事後アンケートでは「戦争の意味のなさ、理不尽さ、悲しさを次の世代に伝えて、国民が平和に生きられる社会が続かなければいけないなど感じる事ができた」といった意見や、知覧を題材にした映画については「生きたいと思うことは恥じゃないという言葉が響いた。この映画をたくさんの人に見せて、自殺しようとしている人を減らしていきたい」等、生きる権利についても気付くことができた。当日の見学の中で、特攻隊員の「行きたくない」「もっと生きたい」との記述を目の当たりにし、自分自身の生についての考えを深めた生徒が多く、他者の痛みや感情を共感的に受容できるための想像力や感受性を育んだ。